

トマス・アクィナスにおける「第一原因」

——「作出因としての性格」と「目的因としての性格」をめぐって——

岡崎 文明

I 序論 問題提起

第一原因 (causa prima) を如何に捉えるかによって哲学の基本的な性格が決まる。それほどまでに第一原因の理解は哲学にとって重要な意味を持っている。

ところで、トマス・アクィナスの哲学はアリストテレスの哲学から多くの影響を受けている。しかし第一原因の思想に関してはアリストテレスからばかりではなく他の思想からも何らかの影響を受けているように思われる。なぜならトマスにおける第一原因は何よりもまず万有の「作出因」(causa efficiens) であるのに対してアリストテレスの第一原因はそうではないからである¹⁾。トマスの「第一作出因」(prima causa efficiens) に関する教説は根本的には聖書とりわけ『創世記』や『出エジプト記』に基づいている。しかし、その哲学的な学説は教父哲学、アラビア哲学、ユダヤ哲学等から多くの影響を受けているばかりではなく、また新プラトン主義からも大なる影響を受けている。そこで拙論では、『神学大全』を軸に、「第一原因」の解釈をめぐって、トマスにおける新プラトン主義の影響を、しかもその極く一部を見ることにしたい。

ジルソンによると古代ギリシアは存在に対する善の優位性の思想の伝統にあるとされる²⁾。これは新プラトン主義にもよくあてはまる。なぜなら、プロティノス (205-270) からプロクロス (412-485) にいたる古代ギリシアの新プラトン主義の系譜では第一原因は「善一者」と捉えられているからである。

中世における新プラトン主義の影響に関しては、アウグスティヌス (354-430) 後からフィキヌス (1433-1499) 前に至るほぼ一千年間は直接的にはプロティノスの影響は殆どなく、代わってプロクロスの影響が色濃く現われていた時代である³⁾。

中世の哲学者トマス・アクィナスもかかる時代環境にあって、新プラトン主義の影響を様々な経路から受けているが、しかしとりわけプロクロス哲学を直接学び知っていたことが窺われる。それは次の事情による。

プロクロス哲学の強い影響下で 500 年頃に成立したとされるディオニシウス・アレオパギタ文書の註解にトマスは 36 歳の時に着手している。また 9 世紀から 12 世紀の間のある時点で成立したとされる新プラトン主義文書『原因論』の註解書を 44 歳の時に書いている——この『原因論』はプロクロスの『神学綱要』の抜粋書とさえ言われるほどにプロクロス哲学の影響を受けた文書である。さらにこの前年の 1268 年にムールベークのギヨームによってプロクロスの『神学綱要』がラテン語に訳され、彼はこれを直ちに読んでいる。これらの事実からトマスは、『神学綱要』から直接的に、かつアレオパギタ文書と『原因論』の解釈を通して間接的に、プロクロス哲学を正確に学び知っていたことがわかるのである。

ではトマスはこれらの文書からどのような影響を受けたのであろうか。先述したように新プラトン主義は第一原因を何よりも先ず「善」(bonum) と捉えているが、トマスの 40 歳ころに書かれたと推測される『神学大全』第 1 部第 5 問第 2 項異論 1 において、彼は新プラトン主義者ディオニシウスのこの考えを取り上げている。それは「神の諸名称の中で善を存在者よりも優先させる」という思想である⁴⁾。トマスはこれを解釈していく中で「第一原因」を如何に捉えるかという問題に言及している。彼はその異論解答においてこう解釈する。

「ディオニシウスは、神に関する〈原因としての在り方〉を含意するものとしての神の諸名称について論じている。実際われわれは神を名付けるのに、彼の言うごとく、原因を名付けるのにその結果をもってすると

いう方法によって、被造物をもってする、ところで〈善〉という名称は、〈欲求されうるもの〉という性格を有しているから、〈目的因としての在り方〉を含意している。この目的因の原因性は（諸原因のうち）第一である。なぜなら、質料が形相に向かって動かされるのは作用者によるのであるが、この作用者が働くのは他ならぬ目的のためであるからである。それゆえ目的は、〈諸原因の原因〉(causa causarum)といわれる。かくて、原因として働くことにおいて目的が形相よりも先であるように善は存在者よりも先である。また同じ理由によって、神の原因性(causalitas)を表わす諸名称の中で、善は存在者よりも先にあげられる。⁵⁾

つまりトマスによると、神の名称は被造物から取られるが、被造物においては目的因(causa finalis)は、原因性という観点からすれば、「諸原因の原因」として〈四原因中の第一〉である。これを神に適用すれば、神の原因性を表わす諸名称の中で「善」が第一であり「存在者」よりも優先している、というのである。

ここからわかることは、「善」という名称下で捉えられたディオニシウスの第一原因は、トマスによれば、(1)目的因として、(2)原因性という観点からすれば目的因が四原因中の第一として他の諸原因に優位している、と解釈されている。そしてこの点で第一原因を何よりもまず「善」と捉えた新プラトン主義の考え方をトマス自身がここでは認めているように思われる。

さらに、同書の第1部第6問第1項主文において、

「善であるということは特別に神に適合することである。⁶⁾

と述べ、トマス自身も第一原因に「善」すなわち目的因の性格が他の原因の性格よりも優れてあることを認めているかのような言い方をしている。

ところがこのテキストをよく見てみると次のように結論している。

「それゆえ、神は万物の第一作出因であるから、〈善〉ないし〈欲求されうるもの〉の性格が神に適合することは明らかである。⁷⁾

ここでは、神は万物の「作出因」であるからここから神は万物にとって「欲求されうるもの」の性格すなわち「善」の性格を持つ、というのである。つ

まり、第一原因は先ず「作出因」であることを前提とし、ここから「目的因」の性格を持つに至る。したがって「作出因」としての性格が「目的因」としての性格よりもより根源的であることになる。この意味で作出因が目的因に優位していることが、このテキストから読み取れるのである。

以上のように、トマスによると、『神学大全』第1部第5問第2項異論解答1では「目的因としての性格」が、同書第1部第6問第1項主文では「作出因としての性格」がそれぞれ優位しているとされているように思われる。一見したところ矛盾していると思えるこれらの二つの立場を如何に考えればよいのであろうか。そこでもう一度順次テキストを検討していこう。

II トマスの「目的因の優位性」のテキスト

1 『神学大全』における目的因の優位性

先ず「目的因」からみることにしよう。『神学大全』の先とは別の箇所、第1部第5問第4項主文では目的因が諸原因の中で第一であることを次のように説明している。

「善とは、すべてのものがこれを欲求するところのものであるから、これは〈目的〉の性格を有している。すなわち、善が目的の性格を含意していることは明らかである。しかしながら、善の性格は、作出因の性格と形相因の性格とを前提としている。(中略)ところで〈原因すること(=原因性)〉において、まず第一に見いだされるのは善ないし目的であり、これが作出者を動かす。第二は、作出者の働きであり、これは形相に向かって動く。第三に、形相が到来する。⁸⁾」

つまりここでは、善は目的の性格を有しており、更に作出因と形相因の二性格を前提としている。そして何らかのものが生成する場合、「原因性」の観点からすれば、そこには第一に目的があり、第二に作出者が働き、第三に形相が到来する、と言うのである。この意味で「目的因」が他の諸原因に先立ち優位することになる。これは先の同問第2項で「諸原因の原因」と言われていたことである。

そこでこの関係を第一原因に適用すれば、目的因としての性格が作出因としての性格よりもより根源的であり、したがってこの意味で優位することになる。

では、このような「目的因の優位性」の思想をトマスは一体何処から知ったのであろうか。果たしてディオニシウスのような新プラトン主義文書からであろうか。これを検討するためにもう少しトマスのテキストを調べてみなければならない。

2 『自然学註解』における目的因の優位性

目的因が「諸原因の原因」であるという思想はトマスの『アリストテレス自然学註解』においても見出される。この書はトマスの43歳の著作である。

ところで、アリストテレスは『自然学』の195a23-25の箇所で次のように述べている。

「また、他のもの共の目的かつ善としての原因がある。というのも、他のもの共がそのためにそうあるところのものは、最も善なるものであり、かつ他のもの共の目的であるのを常としているからである。⁹⁾」

そしてこの原文は次のようにラテン語に訳されている。

*Aliae autem sicut finis et bonum aliorum: quae enim est cuius causa, potissima est, et finis aliorum voluit esse.*¹⁰⁾

ここで注目すべきはアリストテレスの原文で *βέλτιστον* (最も善なるもの) と言われている語がラテン語では *potissima* と訳されていることである。辞書によると *βέλτιστον* というギリシア語は *best* という意味の他に、*most excellent* の意味も持っている¹¹⁾。これに対して *potissima* は *the chief* の他に *most prominent* という意味がある¹²⁾。したがって両方の後者の意味…… *most excellent* と *most prominent* …… がほぼ同義であるがゆえに、*βέλτιστον* は *potissima* とラテン語に訳されたのであろう。

ところでトマスは、まさにこの箇所を註解して次のように述べている。

「しかし、他の諸原因においては、目的あるいは善が原因の性格を持つかぎりにおいて、原因の別の性格が見いだされる。そしてこの種の原因は

他の諸原因の間で最も卓越している (potissima est inter alias causas).」¹³⁾

トマスはここで目的因が諸原因のなかで「最も卓越している」(potissima)ということ、これに着目しており、更に続けてこの理由を

「なぜなら、目的因は他の諸原因の原因 (aliorum causarum causa) であるからである」¹⁴⁾

と説明している。

トマスはここで「最も卓越している」というラテン語の訳語を「諸原因の原因」という概念に結び付けて、目的因は「諸原因の原因」であると解釈している。

このように、ここにも「目的因」が他の諸原因に優位するという思想を確認することができる。したがって「諸原因の原因」という思想は(アリストテレスにこの言葉がそのまま見出されるかどうかは別にしても)新プラトン主義文書からというよりはむしろアリストテレスの考え方から受け取られていると思われる。

トマスは、『自然学註解』で、更に続けて目的因が「諸原因の原因」と言われる理由を次のように説明する。

「つまり、明らかに作用者は目的のために働く。そして同様に先に人工物において示されたが、形相は目的としての使用に秩序付けられ、そして質料は目的としての形相に秩序付けられている。そしてその限りで目的は諸原因の原因と言われる。」¹⁵⁾

作用者は「目的」のために (propter) 働くから、また、形相も質料も「目的」に秩序付けられているので (ordinare), 「目的因」は残りの諸原因よりもより根源的であり、したがって「諸原因の原因」となる。

では、このような思想をトマスは一体何時アリストテレスから学んだのであろうか。そこでこれを見るために次にトマスの初期、すなわちその青年時代、29歳頃の著作『自然の諸原理について』を見てみよう。

3 『自然の諸原理について』における目的因の優位性

この書では例をあげて目的因が「諸原因の原因」であることの説明が詳し

くなされている。そのテキストにこう述べている。

「同じ或るものが同じものに関して、だが異なった仕方ではあるが、〈原因〉と〈原因付けられたもの〉であることが可能であるということも又知られるべきである。例えば散歩は作者として健康の原因であるが、しかし健康は目的として散歩の原因である。なぜなら、散歩は時には健康のためにあるからである。」¹⁶⁾

二つのもの（例えば「健康」と「散歩」）は、異なった仕方ではあるが、お互いに「原因」と「原因付けられたもの」（＝結果）になることは可能である。例えば、「散歩」は「健康」の原因であるが、観方を変えれば、「健康」は「散歩」の原因となる。しかしこの場合、原因としての在り方が異なる。健康は「目的因」として、散歩は「作出因」としての在り方をしているからである。

では、どうしてそのような在り方が可能なのか。その理由をトマスはこう続けている。

「つまり、目的は作用者の働きによるのでなければ現実態にはないから、作者は目的に関して原因と言われる。しかし（他方）、（作者は）目的の意図によるのでなければ働かないから、目的は作者の原因と言われる。」¹⁷⁾

目的が現実態となるのは作用者（＝作者）が働くことによってであるから、作者目的の（実現の）原因となる。しかし他方、作者は目的の意図によって働く（＝現実態となる）のであるから、反対に目的が作者の原因となる、と言うのである。ここからすれば作出因も目的因も互いに対等に原因となるのであって、とりわけ目的因の作出に対する優位性はないように思われる。

しかしトマスはさらに続けて次のように重要なことを述べている。

「そこから、作者は目的であるもの……例えば健康……の原因である。しかしながら作者は目的を目的とするのではない。そして（作者は）目的の原因性の原因（causa causalitatis finis）ではない。つまり（作者

は) 目的を目的的 (finalis) とするのではない。例えば、医者は健康を現実態にしはするが、しかし (医者は) 健康が目的であることを作りはしないようにである。」¹⁸⁾

作者は、なるほど目的の (実現の) 原因ではあるが、しかし目的を目的とするのではない。すなわち、作者は目的の「原因性の原因」ではない、と言うのである。例えば、医者は健康を実現する。その意味で医者は健康の作出因である。しかしだからと言って、医者は健康を「目的」にするのではない。健康はすべての人にとって「目的」であり、誰かがそうしたからというのではなくて、本性的に、元々、そうになっている。つまり医者 (作出因) は健康が目的因となるところの「原因性の原因」ではないのである。

ここから明確になることは、作出因は目的を実現するが、しかし目的を原因 (=目的因) とするのではない。これを作出因は「目的因の原因性の原因」ではないと言うのである。いや作出因のみならず形相因も「目的因の原因性の原因」ではない。

トマスは続くテキストにおいて、

「しかし、目的は、作者であるところのものの原因ではなくて、作者が作者であるために原因である。例えば、健康が医者を作る原因ではないように。」¹⁹⁾

と述べている。目的は、例えば健康は「或る人」を作る原因ではない (「或る人」を作る原因は医学校である)。このように目的は或るものを作る原因ではない。しかしながらトマスは、「目的は作者が作者であるために原因である」と言う。これは一体どういう意味であろうか。

トマスは続けて、

「しかしそれ (健康) は、医者が作者であることを作るのである。そこから、目的は作者の原因性の原因である。なぜなら、それ (目的) が作者を作るからである。」²⁰⁾

と述べる。つまり、目的としての健康が医者を作る原因なのである。即ち、

医者が医者としてあるのは医術を働かせているときである。そして医者が医術を働かせるのは病人を相手に健康を目指して活動しているときである。したがって、この場合「健康」という目的が「医者」を健康の作出者として働かせているのである。もし健康という目的がなければ（つまり病人を治して健康にしようという意図がなければ）、医者は医者として現実態にあるのではなく、医者としては所有態にあるところのただの人である。

このように目的因があって、これが所有態にある作出因を現実態にある作出因にしている。このことを「目的が作出者を作出者とする」と言うのである。この意味で目的は作出者の「原因性の原因」とされる。

同様のことが形相因と質料因にもあてはまる。トマスはそれをこう述べている。

「同様に、（目的が）質料を質料にし、そして形相を形相にする。なぜなら、質料は目的によるのでなければ形相を受け取りはしないし、また形相は目的によるのでなければ質料を完成するのでないからである。そこから、目的は〈諸原因の原因〉であると言われる。なぜなら（目的は）すべての原因において〈原因性の原因〉であるからである。」²¹⁾

つまり、目的因によって形相因は形相因となり質料因は質料因になる。ここから目的因は諸原因の「原因性の原因」であり「諸原因の原因」である。

トマスの『自然の諸原理について』の以上の箇所は、レオ版の註によれば、内容的にアリストテレスの『自然学』第二巻、『形而上学』第五巻、第六巻等に並行している。以上からトマスはすでに青年時代に、目的因が他の諸原因に優位しているという思想をアリストテレスから学んでいたことが判明する。

Ⅲ トマスの「作出因の優位性」のテキスト

1 『原因論』における「作出因」の優位性

それではトマスの「作出因」の優位性の思想……ここでは、哲学的な思想を問題としているのであるが……はいったいどこから彼に流れ込んだのであ

ろうか。この思想源泉は他にもあろうが、新プラトン主義もその一つであると思われる。

トマスは44歳の時に『原因論註解』を書いている。この元になった新プラトン主義文書『原因論』の命題 17(18), 148 ではこう述べられている。

「第一の存在者は静止しており、諸原因の原因であり、そしてこれがすべてのもの共に存在者を与えるならばその場合にはそれは創造という仕方によってそれらに与える。」²²⁾

ここにも「諸原因の原因」の語が使われている。しかしコンテクストによるこの「諸原因」はアリストテレスの四原因ではなくて『原因論』の枠組となる「第一の存在者 (ens primum)」「第一の知性者 (intelligentia prima)」「第一の魂 (anima prima)」を指している。この三者の中で第一原因である「第一の存在者」が「諸原因の原因」となる。しかもこれは万物に存在者 (ens) を与える。そしてこのことが「創造」(creatio) ということである、と言われている。したがって『原因論』では「諸原因の原因」は万物の「創造者」を、そして内容的には「第一作出因」を指している。

今まで考察してきた語法からすればこの「諸原因の原因」という語の用いられ方はアリストテレス的ではないが、しかし『原因論』で「第一作出因」を「諸原因の原因」と呼んだのは、同書では「作出因」こそ「諸原因中の第一」であるとしているからであると思われる。ここに『原因論』の「作出因の優位性」の特徴を読み取ることができるであろう。

しかし、新プラトン主義文書『原因論』では第一原因は、同時に「第一の善」でもあり²³⁾、そして万物が希求する (desiderant) ものである²⁴⁾。それゆえ、少なくとも、この第一原因は目的因と作出因の両性格を兼ね備えていることが確認される。これはアリストテレスと決定的に異なる点である。

しかしながら、トマス自身は『原因論註解』の中でこの箇所の「諸原因の原因」については直接何も言及してはいない。

2 『原因論註解』における「作出因」の優位性

トマスが『原因論註解』において四原因説に言及している箇所のひとつは、

命題一の註解の部分である。トマスによると、命題一の主旨は「(1) 第一原因は第二原因よりもより多く結果に流れ込み、(2) 第一原因の刻印は第二原因のそれよりも遅く結果から退去し、(3) 第一原因の刻印は第二原因のそれよりも先に結果に到来する」の三つのことにまとめることができる。そしてこれは四原因のすべてにあてはまる。しかしとりわけ作出因においてはこれらの三つが「根源的な仕方」(primordialiter) あてはまる。

まず、形相因、質料因の各原因の秩序は共に作出因から演繹され (derivare)、したがって作出因がこれらの原因よりも根源的であると述べられ²⁵⁾、そして次に作出因が目的因に優位することが示される。テキストは、

「諸々の目的因においても、やはり、上述のすべてのこと (=三つのこと) が真となることがあきらかである。」²⁶⁾

と述べて、命題一の主旨が目的因にもあてはまるとし、そしてさらに続けて、

「しかし、この秩序の性格もまた作出因の類へと還元される。なぜなら、目的とは、作出者を働くべく動かすかぎりにおいて、そのかぎり原因であるのであり、この意味において (目的は) いわば動かすものの性格を持つものとして、或る意味で作出因の類に属するのだからである。」²⁷⁾

と述べている。ここでは、「目的因が作出因を働くことへと動かす (movet ad agendum)」とされ、それゆえ目的因は〈動かすもの〉(movens)の性格(ratio)を持ち、したがって目的因は作出因の類(genus)に属する。それゆえ、目的因の秩序も作出因へ還元される。この意味で作出因は目的因よりもより根源的であり優位している。

3 『神学大全』における作出因の優位性

さて、次に、先に少し見た『神学大全』第1部第6問第1項主文の箇所をもう一度見直してみよう。

「善であることは特別に神に適合することである。そもそも何らかのものが善であるのは、それが〈欲求されうるもの〉である限りにおいてである。ところでそれぞれのものは、自己の完成を欲求する。しかるに結果の完全性と形相は、その結果を生み出す作用者のある類似性にほかな

らない。作用者はすべて、その作用によって自分に似た結果を生みだすものだからである。それゆえ作用者はそれ自身欲求されうるものであり、善の性格を有している。作用者について欲求されるものは、作用者の類似性を分有したいということだからである。それゆえ、神は万物の作出因(*causa effectiva*)であるから、〈善〉ないし〈欲求されうるもの〉の性格が神に適合することは明らかである。」²⁸⁾

ここでトマスは「善であることは特別に神に適合することである」と結論を先に述べて次にそれを証明するという形式をとっている。

まず、〈欲求されうるもの〉という〈善の性格〉が指摘され、続いて、すべてのものは「自分の完成」を欲求するのであるから、「自分の完全性」は自分にとって「善」である。そして、結果の完全性と形相は作用者(原因)の類似性である。(なぜなら、原因は自分に似たものを産み出すからである。)ところで、「原因である作用者」の形相は完全であり、「結果」の形相はそれよりも不完全であるから、不完全なものは完全なものを求める。したがって不完全な「結果」は「作用者」の持つ完全性(*perfectiones*)を欲求し、より完成したものになろうとする。ここから「作用者」は「結果」から見れば「欲求されうる」という「善の性格」を持つ。すなわち「目的の性格」を持つのである。

ここに明らかに、「作用者が結果を産み出した」ことが前提となって、「その作用者に目的の性格が現われる」という証明の構造を読み取ることができる。

そしてこれを神に適用して、「神は万物の作出因であるから、〈善〉ないし〈欲求されうるもの〉の性格が神に適合することは明らかである。」と結論している。先述した如く、ここに「作出因」が根拠となって「目的因」の性格が導き出されているのを見ることができる。

トマスは同箇所のテキストの最後にディオニシウス解釈を次のように述べて締めくくっている。

「ゆえに、ディオニシウスも『神名論』において²⁹⁾、神はくそれによっ

て万物が存立するところの者」として善であると述べて、第一作出因としての神に善を帰属させているのである。³⁰⁾

ディオニシウスは神を「それによって万物が存立するところの者」すなわち「善」すなわち「第一作出因」である、としているのである。

先に見た第5問第2項異論解答1では、「第一原因に関してディオニシウスは目的因が他の諸原因に優位しているという思想を持っている」と、トマス自身が解釈していると思われたが、しかしここ第6問第1項主文に至って初めてトマスは、ディオニシウスの第一原因つまり「善」は実は「目的因」ばかりではなくて「作出因」でもある、と解釈していることが判明する。

4 『神名論註解』における作出因の優位性

さて、ここで、上にトマスが引用した『神名論』の箇所の前後のラテン語訳のテキストを見てみよう。

「そして万物は、根源 (principium) として、保持者 (continentia) として、目的 (finis) として、それ (= 神性 = 善性) を求める。³¹⁾

神である善性 (bonitas) は「根源」であり「保持者」でありかつ「目的」である。万物はこれを「求める」。この「求める」という言葉はラテン語では desiderant とされており、原語では ἐπίεταί である。そしてこの言葉は、プロクロスの『神学綱要』においてしばしば「すべての存在者は善を求め^る」³²⁾と言う文中で使用されている。ここにプロクロスの影響を見ることができる。ここからディオニシウスでも「第一原因」は「万物が憧れ求めていくもの」であることが判明する。

このテキストはさらに続けて、

「善は、そこから万物が、ちょうど完全な原因から引き出されたもの共の如くに、存立しかつ存在するところのものである。³³⁾

と述べている。これが上に見たトマスの引用箇所を含んだ文である。これは第一原因としての善が「万有の作出因」であることを述べている。

さらにテキストは少し後に、

「また、(善は、) 個々のもの共が固有の目的に向けられるような仕方で、

万物がそこへと向けられるところのものである。」³³⁾

と述べている。ここに「向けられる」という語はラテン語では *convertuntur* と訳されている。原語は *ἐπιστρέφεται* である。この語もプロクロスにおいて「存在者が善へ帰還する」等の文中にしばしば用いられている。ここにもプロクロスの影響を見ることができる。すなわち、このテキストでは、善は万物の帰還する「目的」であることが述べられている。

以上見てきた範囲からすれば、ディオニシウスにあっては、第一原因は万物の「作出因」であり、そして同時に「目的因」であることが判明する。

さて、トマスはこれを『神名論註解』において次のように註解している。

「つまり、万物が神に向けられるのは、万物が神を三重の理由によって求める限りにおいてである。すなわち、〈働く根源〉 (*principium activum*) として、また、〈保持するもの〉 (*continentia*) としてつまり諸事物を〈維持するもの〉 (*conservantia*) として、そして、〈目的〉 (*finis*) としてである。」³⁴⁾

万物が神に「向けられる」あるいは「帰還する」のは三つの理由に基づいている。第一に神が万物の「働く根源」つまり万物の「作出の根源」であることに、第二に神が万物の「保持者」であることに、第三に神が万物の「目的」であることに、基づいている。観方を変えれば、第一に万物は神に「作出」され、第二に万物は神に「保持」され、最後に万物は神に「帰還」する。

続いてこれらの三つの理由を詳しく解説する最初に、トマスはこう述べている。

「われわれは神を〈根源〉として求める。なぜなら神からわれわれに善が生じて来る (*provenit*) からである。」³⁵⁾

トマスは、われわれが神を根源として「求める」 (*desideramus*) わけは、われわれのところにある善が、神から生じて来るからである、という。言い換えれば、〈われわれのところにある善が神によって作出された〉ということが根拠となって、〈われわれは神を求める〉という。ここにも、トマスの、「作出因の目的因に対する優位性」を読み取ることができるのではなからう

か、

これは先に見た『神学大全』第1部第6問第1項主文最後のディオニシウス解釈に一致する。

IV 各優位性の背景

1 「目的因の優位性」の背景……世界永遠説

「目的因の優位性」の思想は「宇宙万有の存在」を前提としている。なぜなら、第一原因を目指す宇宙万有が先ず存在していなければ「万有の目的因」としての性格もまた存在し得ないからである。したがって「目的因の優位説」は「宇宙万有が永遠である」ことを前提としている。

ところで、今まで見てきた範囲で言うなら、かかる思想はアリストテレスにある。アリストテレスの世界はその存在の時間的発端はなく、永遠から永遠に存在し、したがって「世界の永遠説」と言われる。そして「万有」は「第一原因」を求め、そこから「第一原因」は「目的因」の性格を持つに至る。こうして、アリストテレスの「第一原因」はまず最初に「万有の目的因」となる。

それであるから次に、万有は「第一原因」を憧れて動く³⁶⁾。そこから「第一原因」は万有の「始動因」(causa movens)……「不動なる第一動者」……となる。したがって少なくともアリストテレスにあっては、第一原因の「目的因の性格」がその「始動因の性格」よりも根源的であり優位していると言うことができるであろう。これが、アリストテレスの世界観が「目的論的」であると言われる所以である。ここに先述したジルソンの言う「古代ギリシアにおける〈善の優位性〉の思想」が見い出される。

そして第一原因のかかる捉え方から万有すなわち自然世界を見るなら、この中に目的因が他の諸原因に優位していることが投影される。そしてここから目的因が「諸原因の原因」として、あるいは他の諸原因の「原因性の原因」であるとして、見て取ることができるのである。

以上が「目的因の優位性」の背景にある思想と思われる。トマスはこの説

をこの立場に立って理解し、「原因性」という観点からこの説を限定して認めている。

2 「作出因の優位性」の背景……世界作出説

『原因論』では「第一原因」は「作出因」(＝創造者)でもある³⁷⁾。また、ディオニシウスの「第一原因」も「作出因」である。さらにトマスの「第一原因」もそうである。三者はこの限りで共通している。この「作出因」は四原因説からすれば「始動因」(「目的因の優位性の思想」における)と共に「動因」という類に属するが、しかし両者の性格は大きく異なる。「作出因」には「始動因」に見られない特徴が見出される。それは「〈作出されたもの〉(＝結果)は作出されたが故に作出因を求める」という特徴である。ここから第一原因は万有の「目的因」の性格を有することになる。この特徴はプロクロスにも見られる。例えば、その『神学綱要』の命題12の証明過程においてもこの特徴が明確に現われている³⁸⁾。

そしてこの特徴の前提には「〈作出因〉は〈作出されたもの〉(＝結果)よりも優れている」という思想がある。しかしこの思想はすでにプロクロスの『神学綱要』の命題7

「他を産むことができるものはすべて、産み出されたものよりも優れている」³⁹⁾

に現われている。

これらの考えは「作出因の優位性」の思想に属する。かかる「作出因の優位性」の思想は、先とは逆に、「宇宙万有の非存在」を前提とする。なぜなら、もし万有が既に存在しているのであれば、もはや「万有の作出因」は不要であるからである。したがって、「作出因の優位性」の思想は「宇宙万有の存在以前」(時間的ではなく存在秩序上の以前)を前提としている。したがって、その背景にあるものは「世界は作出された」……その意味を如何に考えるかは別にしても……という根本的な考え方である。

さて、この場合、「第一原因」は、先ず、万有を作出する。そこから「第一原因」は「作出因」の性格を帯びる。その次に、作出された万有は「第一

原因」を目指す。するとそこに「第一原因」は「目的因」の性格を帯びる。したがって「作出因としての性格」の方が「目的因としての性格」よりも根源的であり、優位していることになる。

この「世界の作出説」は、トマス、『原因論』、ディオニシウス、プロクロス⁴⁰⁾の背景に共通する根本的な考え方である。そしてこれは「目的因の優位性」の背景にある「世界の永遠説」に対立する。

V 結論……トマスにおける「作出因の優位性」

と「目的因の優位性」の関係

では「目的因の優位性」と「作出因の優位性」の関係をトマスはどのように考えているのであろうか。今まで見てきた範囲から考えるとすれば、両者の関係は哲学的に次のように解釈することができるであろう。

「目的因の優位性」は、トマスにおいて、自然学の領域で論じられているところからすれば、自然世界の内における四原因によくあてはまる。トマスは、「この自然世界を前提しこの世界内において原因を観る」場合にはアリストテレスの言うように「目的因が優位している」と考えているように思われる。しかもこの思想を、トマス自身は「原因性」という限定された観点から見た範囲において認めている。そしてこの限りにおいてこれをアナログア（あるいは「完成の道」*via perfectionis*）に従って神にまで拡張している。例えば、先に見た『神学大全』第1部第5問第2項異論1におけるディオニシウスの解釈にこれが適用されている。

しかしながら「自然世界内の原因」ではなくて、「自然世界[・]全体の原因」つまり「第一原因」を観た場合には、自然世界の内を観ただけでは観えない原因の根本的な姿が出現する。つまり、自然世界[・]全体は「作出の結果」であり、その根源は「作出因」である、という姿が出現してくる。さらに「結果」が「作出因」を求めている様相も見て取ることがきる。するとそこでは何よりも「作出因」が「目的因」よりも「根源的」であり「優位している」と見える。

このように、トマスは「自然世界をその内部においてまた内部から見た場合」と「自然世界の外から、その全体とその根源とを合わせて見た場合」とを区別し、前者では「目的因が優位し」、後者では「作出因が優位する」としている、と解釈することができる。

そしてこの「作出因の優位性」の思想が、第一原因の[・]哲[・]学[・]的[・]解[・]釈[・]に[・]関[・]して[・]ア[・]リ[・]ス[・]ト[・]テ[・]レ[・]ス[・]哲[・]学[・]から「不動の第一動者」、「思惟の思惟」や「純粹現実態」等の多くの概念を受けつつも、しかしアリストテレス哲学と根本的に袂を分かち強力な支点となったのではないかと思われる。

以上見てきた新プラトン主義の第一原因の思想は、トマスの「作出因の優位性」の思想の唯一の思想源泉ではないにしても、少なくともトマスの根本的な考え方と共通するが故に、その哲学の内に取り込まれ、そしてトマスが「創造論」を形成する哲学的基礎の一つとなっていたのではないであろうか。

註

- 1) ここで言う「作出因」とは「宇宙万有（全体）を非存在から存在へもたらす〈原因〉」を指す。アリストテレスの第一原因は例えば「天体」を非存在から存在へもたらしたりはしない。その意味でこれは宇宙万有（全体）の「作出因」ではない。この点でアリストテレスの第一原因はトマスや新プラトン主義の第一原因と区別される（会場での質問に対する付記）。
- 2) É. Gilson, *L'Esprit de la philosophie médiévale*, (1978, Paris), p. 55.
- 3) P. O. Kristeller, "Proclus as a Reader of Plato and Plotinus, and his Influence in the Middle Ages and in the Renaissance", in Pépin et H. D. Saffrey ed., *Proclus*, (1987, Paris), p. 194.
- 4) Thomas Aquinas, *Summa theologiae* (以下, Thomas Aquinas と書名は省略する), I, 5, 2, ag. 1.
- 5) I, 5, 2, ra. 1, 訳文中の () は筆者の補足。
- 6) I, 6, 1, co., bonum esse praecipue Deo convenit.
- 7) *ibid.*, Cum ergo Deus sit prima causa effectiva omnium, manifestum est quod sibi competit ratio boni et appetibilis.
- 8) I, 5, 4, co. Respondeo dicendum quod, cum bonum sit quod omnia

appetunt, hoc autem habet rationem finis; manifestum est quod bonum rationem finis importat. Sed tamen ratio boni praesupponit rationem causae efficientis, et rationem causae formalis. In causando autem, primum invenitur bonum et finis, qui movet efficientem; secundo, actio efficientis, movens ad formam; tertio advenit forma. 訳文中の () は筆者の補足

- 9) Aristoteles, *Physica*, 195a23-25. τὰ δ' ὡς τὸ τέλος καὶ ἀγαθὸν τῶν ἄλλων. τὸ γὰρ οὐ ἔνεκα βέλτιστον καὶ τέλος τῶν ἄλλων ἐθέλει εἶναι.
- 10) Thomas Aquinas, *In physicorum*, L. II, 1. V, C. III, textus Aristotelis, 120 (31).
- 11) Liddell & Scott, *Greek-English Lexicon*, (Oxford, 1968).
- 12) Deferrari, *A Lexicon of St. Thomas Aquinas*, (Baltimore, 1948).
- 13) Thomas Aquinas, *In physicorum*, L. II, 1. V, n. 186 [11]. In aliis vero causis invenitur alia ratio causae, secundum scilicet quod finis vel bonum habet rationem causae. Et haec species causae potissima est inter alias causas.
- 14) *ibid.*, est enim causa finalis aliarum causarum causa.
- 15) *ibid.*, Manifestum est enim quod agens agit propter finem; et similiter ostensum est supra in artificialibus, quod formae ordinantur ad usum sicut ad finem, et materiae in formas sicut in finem: et pro tanto dicitur finis causa causarum.
- 16) Thomas Aquinas, *De principiis naturae*, c. 4. Sciendum est etiam quod possibile est ut aliquid idem sit causa et causatum respectu eiusdem, sed diuersimode: ut deambulatio est causa sanitatis ut efficiens, sed sanitas est causa deambulationis ut finis, deambulatio enim est aliquando propter sanitatem.
- 17) *ibid.*, Efficiens enim dicitur causa respectu finis, cum finis non sit in actu nisi per operationem agentis; sed finis dicitur causa efficientis, cum non operetur nisi per intentionem finis.
- 18) *ibid.*, Unde efficiens est causa illius quod est finis ut sit sanitas , non tamen facit finem esse finem; et ita non est causa causalitatis finis, id est non facit finem esse finalem: sicut medicus facit sanitatem esse in actu, non tamen facit quod sanitas sit finis.
- 19) *ibid.*, Finis autem non est causa illius quod est efficiens, sed est causa ut efficiens sit efficiens; sanitas enim non facit medicum esse medicum.....
- 20) *ibid.*, sed facit ut medicus sit efficiens. Unde finis est causa causalitatis efficientis, quia facit efficiens esse efficiens.

- 21) *ibid.*, similiter facit materiam esse materiam et formam esse formam, cum materia non suscipiat formam nisi per finem, et forma non perficiat materiam nisi per finem. Unde dicitur quod finis est causa causarum, quia est causa causalitatis in omnibus causis.
- 22) *Liber de causis*, prop. 17 (18), 148.
- 23) *ibid.*, prop. 19 (20).
- 24) *ibid.*, 22 (23), 175.
- 25) Thomas Aquinas, *In librum de causis*, prop. 1.
- 26) *ibid.*, In causis etiam finalibus manifestum est verificari omnia praedicta.
- 27) *ibid.*, sed et huius ordinis ratio ad genus causae efficientis reducitur, nam finis in tantum est causa in quantum movet efficientem ad agendum, et sic, prout habet rationem moventis, pertinet quodammodo ad causae efficientis genus.
- 28) I, 6, 1, co. bonum esse praecipue Deo convenit. Bonum enim aliquid est, secundum quod est appetibile. Unumquodque autem appetit suam perfectionem. Perfectio autem et forma effectus est quaedam similitudo agentis: cum omne agens agit sibi simile. Unde ipsum agens est appetibile, et habet rationem boni: hoc enim est quod de ipso appetitur, ut eius similitudo participetur. Cum ergo Deus sit prima causa effectiva omnium, manifestum est quod sibi competit ratio boni et appetibilis.
- 29) Dionysius Areopagita, *De divinis nominibus*, c. 4, n. 121. et bonum est, ex quo omnia subsistunt et sunt sicut ex causa perfecta deducta.
- 30) I, 6, 1, co. Unde Dionysius, in libro *de Div. Nom.*, attribuit bonum Deo sicut primae causae efficienti, dicens quod bonus dicitur Deus, *sicut ex quo omnia subsistunt.*
- 31) Dionysius Areopagita, *De divinis nominibus*, c. 4, n. 121. et omnia Ipsam (=Deitas) ut principium ut continentiam ut finem desiderant:
- 32) Proclus, *Elementatio theologica*, prop. 8. *εἰ γὰρ πάντα τὰ ὄντα τοῦ ἀγαθοῦ ἐφίεται,*
- 33) Dionysius Areopagita, *De divinis nominibus*, c. 4, n. 121. et ad quod omnia convertuntur, quemadmodum ad proprium singula finem.
- 34) Thomas Aquinas, *In librum Beati Dionysii de divinis nominibus expositio*, C. I V, 1. III. n. 317. intantum enim omnia convertuntur in Ipsum, in quantum omnia desiderant Ipsum triplici ratione, scilicet: *ut principium activum;* et *ut continentiam*, id est conservantiam rerum; et *ut finem.*
- 35) *ibid.*, Desideramus enim Deum *ut principium* quia ex Eo provenit nobis

bonum.

- 36) Aristoteles, *Met.* 1072b1-4. ὅτι δ' ἔστι τὸ οὐ ἔνεκα ἐν τοῖς ἀκινήτοις, ἢ διαίρεσις δηλοῖ· ἔστι γὰρ τῶι τὸ οὐ ἔνεκα<καὶ> τινός, ὧν τὸ μὲν ἔστι τὸ δ' οὐκ ἔστι. κινεῖ δὴ ὡς ἐρώμενον, κινούμενα δὲ τὰλλα κινεῖ.
- 37) *Liber de causis*, prop. 8 (9), 79/*ibid.*, 87. quoniam (causa prima) est creans omnes res. () は筆者の補足.
- 38) Proclus, *Elem. theol.* prop. 12. εἰ δὲ καὶ τὰ ὄντα πάντα τοῦ ἀγαθοῦ ἐφίεται, πῶς ἔτι πρὸ τῆς αἰτίας ταύτης εἶναι τι δυνατόν; εἴτε γὰρ ἐφίεται κακείνου, πῶς τοῦ ἀγαθοῦ μάλιστα; εἴτε μὴ ἐφίεται, πῶς τῆς πάντων αἰτίας οὐκ ἐφίεται, προελθόντα ἀπ' αὐτῆς.
- 39) *ibid.*, prop. 7. Πᾶν τὸ παρακτικὸν ἄλλου κρεῖττόν ἐστι τῆς τοῦ παραγομένου φύσεως.
- 40) *ibid.*, prop. 11. Πάντα τὰ ὄντα πρόεισιν ἀπὸ μιᾶς αἰτίας, τῆς πρώτης.

トマス・アキナスの著作年

- 1254年 (29歳) *De principiis naturae*
- 1261年 (36歳) *In Dionysii de divinis nominibus* に着手.
- 1265年 (40歳) *Summa theologiae* I に着手.
- 1268年 (43歳) *In libros physicorum*; Guillelmus de Morbecca により Proclus の *Elementatio theologica* がラテン語訳される.
- 1269年 (44歳) *In librum de causis*